東部南海トラフにおけるメタンハイドレート濃集帯と海底面現象

Highly concentrated methane hydrate bearing zones and seafloor manifestations in the eastern Nankai Trough

長久保 定雄[1]; 棚橋 学[2]; 佐伯 龍男[3]; 稲盛 隆穂[3]; 小林 稔明[3]; 及川 信孝[3]; 藤井 哲哉[4]

Sadao Nagakubo[1]; Manabu Tanahashi[2]; Tatsuo Saeki[3]; Takao Inamori[3]; Toshiaki Kobayashi[3]; Nobutaka Oikawa[3]; Tetsuya Fujii[4]

[1] 日本海洋掘削(株); [2] 産総研・地圏資源; [3] 石油天然ガス金属鉱物資源機構; [4] 石油天然ガス金属鉱物資源機構

[1] Japan Drilling Co., Ltd.; [2] Geological Survey of Japan; [3] JOGMEC TRC; [4] JOGMEC-TRC

東部南海トラフにおけるメタンハイドレート資源量を評価するため、メタンハイドレート資源開発研究コンソーシアム（MH21）では、東海沖から熊野灘にかけて実施された高精度地震探査、試掘、地化学調査、地層温度測定から得られたデータを包括的に解析している。

平成 16 年の 1 月から 5 月にかけて実施された基礎試錐「東海沖～熊野灘」では、高メタンハイドレート飽和率を呈するメタンハイドレート濃集帯が認められている。

このようなメタンハイドレート濃集帯の形成には、浸透性の高い地層や断層を通っている炭化水素を含む流体の移動が関与していると推定され、流体移動路の出口にあたる海底面には炭酸塩岩の沈殿、湧水活動などが認められる。

メタンハイドレート濃集帯周辺の高精度サイドスキャンソナーによる海底面状況調査、潜水艇および深海カメラによる海底面観察、湧水の化学分析をすすめることによってメタンハイドレート濃集帯の形成メカニズム解明並びに探鉱に寄与できると考えられる。